

# 文献センター通信

第 14 号  
2010 年 9 月 5 日  
一部 100 円

今年 6 月に急逝された近藤千

浪さんが保管・管理されて

いた近藤憲二さんの旧蔵資料の目録づくりが始まりました。これまで千浪さんと白仁さんがその整理を手がけてきましたが、その仕事を引き継いで目録を完成させようとするプランです。

とくに旧蔵資料中の写真類は、大杉の 80 周年イベント S 16 の写真展をはじめ、最近では今年のカレンダー「大逆 100 周年」などで貴重な推進力となってきたことは言うまでもありません。資料の活用、デジタル化に

## 「近藤文庫」の目録づくり始めます

よつて一層の利便性を図ることなど、目録作成に合わせる検討していきたいと思えます。

作業の開始に当たり、その準備のための打ち合わせが 8 月 21 日にもたれました。

当日は資料整理では専門家でもある飯澤さんの参加を得て、準備と段取り、進め方などを相談しました(参加 7 名)。

9 月以降、当面は月 1 回のペースで作業にとりかかるとの予定です。

(文献センター)

主な内容	
「近藤文庫」の目録づくり	1
富士宮交流会のご案内	2
アナキズム一箱古本市	3
雑誌「アナキ」について	4
保管倉庫を千葉県に確保	5
センター自己紹介	11
寄贈書	7

## 近藤文庫について

故近藤千浪が、〈近藤文庫〉と名づけて管理・公開してきた資料は、大きく分類すれば四種類の資料がある。

その第一は写真資料で、(1)母真柄を紹介して祖母為子から預かったアルバム 2 冊、ここには「萬朝報」社時代から、祖父堺利彦が関係した社会運動の、時々の人々の姿が記録されている。(2)は、父近藤憲二が『大杉榮全集』編纂に際して、同志や大杉の友人から預かった大杉一家とギロチン社事件関係者、震災時の白色テロルの犠牲者の写真を整理したアルバム 1 冊。(3)は、母真柄が戦後に編んだ数冊のアル

バムなどの写真資料(ここには父近藤憲二が関与した日本アナキスト聯盟の諸氏の姿が記録されている)。

これらの写真資料は早くから、運動史研究者に公開されてきたので、複写のためにアルバムから外され単体になったもの、また初めからアルバムに整理されていないものなど、アルバムに貼られていないものが、アルバムに貼られているものとはほぼ同数くらい残されている。

第二は和田久太郎の市ヶ谷未決拘置中の書簡である。その多くは、同志を代表して近藤憲二が受取人となつたもの。和田の未決拘置中の獄中書簡は、他に江口渕が受取人になつたものが近代文学館に、望月桂兄妹が受取人になつたものは、望月明美家に残る(秋田刑務所収監中の書簡の全ては望月家に残る)。

(次ページに続く)

第三は、書簡、草稿、書跡類。この多くは未整理。(但し、堺利彦の受信・発信した書簡類は、福岡の〈堺利彦・葉山嘉樹・鶴田知也を顕彰する会〉に、早くから寄託されている。)

第四は、戦後検閲制度廃止に合わせ、伏せ字を起こした、戦前には非合法とされた小冊子の復刻小冊子類を含む、書籍類である。所謂初期社会主義運動に関するもの、非共産党系のマルクス主義運動、幸徳・大杉を含むアナキズム運動、婦人参政権運動など、広範囲に及ぶ。堺利彦、為子、近藤憲二、真柄旧蔵の書籍に加え、近藤千浪・白仁成昭両人が蒐集したのものもある。(但し、堺利彦旧蔵の書籍は、向坂逸郎を介して、大原社会問題研究所・向坂文庫に収蔵されている。)

これらの資料について、近藤千浪は、二〇〇三年、映画監督藤原智子との対談で、藤原の「今、

区民ギャラリーで『大杉栄と仲間たち』という展覧会やっていますけど、そのいろんな資料をこれからどうにかして、たとえば一堂に集めて、いつでも見られる状況を作っていたらいいと思うんですね。」という発言に込めて、

「今後どうしようか、公の場所というの何か相応しくないような気がして、できるだけ多くの人に自由に見てもらいたいという気持ちがあるんです。それで今回もできるだけのは出して写真展に出しましたので、是非見ていただきたいと思います。そういう悩みは今日お出で下さっている望月さんにもおありだと思えます。震災をくぐり戦争をくぐり命がけで、自分自身の物を二の次にして疎開させた状況の中で残っているものですから、私としては精一杯頑張つて守っていきますが、もう後どれくらい管理できるかと非常に悩んでいます。ですから是非皆

## 第6回富士宮交流会へのお誘い

毎年静岡・富士宮市の「ふもとの家」にて開催してきた『富士宮交流会』を今回は9月18・19日に開催します。多くの方のご参加をお待ちしております。

夏の富士宮交流会は、会員・支援者の皆さまと親睦を深めるために行うものです。もちろん、お酒だけではありません。若干の書庫作業も用意しています。

日時

9月18日(土) 午後2時～

懇親会 午後6時～

9月19日(日) 午前中 書庫

作業(掃除・整理など) 昼食

後に解散

会場

ホステル ふもとの家

静岡県富士宮市杉田251

申込・連絡 Eメール(奥付

参照) または電話0904・

664・0801(佐藤、19日

まで交流会専用です。)

さんのお知恵を借りたいと思えます。できるだけ利用して、今の世の中です。受け継いで活かしていくことは、あの時代を生きた人たちのことを残すということ、皆が考えていかなきゃいけないと思いますので、どうぞよろしくお願いします。」と発言している。

近藤千浪は、三年くらい前から、

第三の未整理資料の整理を始め、果たさぬうちに帰らぬ人となつてしまつたのだが、この仕事は、父母の生き方に思想的に向き合おうという意味もあつた。なんとか、この近藤の遺志を全うしたいと考えて、文献センターを始めとする有志の方々に参加を求め、目録作成作業に着手するところとなつた。

(白仁成昭記)

【レポート】

## 第1回 アナキズム一箱古本市

7月24日（土）、東京は新宿のカフェ・ラバンディアで第1回アナキズム一箱古本市（イレギュラー・リズム・アサイラム、虹霓社共催）が開催され、多くの人で賑わいを見せた。

一箱古本市とは最近流行りのイベント形態で、各人が段ボールや木箱に入れた古本を持ち寄り、箱をそのまま広げて見せるという仕組み。種類も価格も「店主」の自由。不忍ブックストリートの一箱古本市は人気のイベントとなっており、また「一箱古本市の歩きかた」なる本も刊行されているので、ご存知の方もいらつしやるのではないだろうか。

そして、その一箱古本市を「アナキズム」をテーマにしてしまおうという企画が今回のイベントである。「それぞれがアナキズムだ

と思えば何でもOK」という募集内容だけあって、いろいろな「アナキズム」が集まった。

当日参加した8つの「古書店」はそれぞれがそれぞれの売り方でお客さんにアピール。じっくりお客さんとの会話を楽しみながら売る「店主」もいれば、根負けして？早々に値引きしてしまう「店主」も。また他の店主を巻き込んで競りを始めてしまう「店主」もいたり、店主もお客さんも普段あまりない雰囲気を楽しんだ様

子。また当日はプロの古書店（神保町のりぶるりべろ）が参加していて、普段めつたに見られない戦前の「週刊平民新聞」が手に取って見られたりと、多いに賑わった一日だった。

主催側としては、この日の盛況を受けて、近いうちに第2回を予定している。ご興味を持ったかたは、たまには「店主」として参加してみるのも面白いのではないだろうか。

(古屋)



## 雑誌「アナキー」について

磯谷武郎

書物の整理は最も貴重なものから手放すのに若くはないと思ひ、数年前にロツカー『マックス・ネットラウ』のドイツ語源書やスペイン語訳書など特に大事なものをある研究所に寄贈した後も、それきり整理しないままになっていった。来年こそ整理をと思ひ、去年の秋に雑誌「アナキー」を文献センターに寄贈した。この雑誌について一言する。

「アナキー」は1961年3月から70年12月まで英文でロンドンの、1886年にクロポトキン等によって創設されたフリーダム・プレスから刊行された月刊誌である。私の所蔵していたのは、復刊ではなく発売時のままの各号

を各年ごとに製本したもので、売れ残り（あるいは当初の予定）に頑丈な表紙をつけて合本したものと見えると思う。

編集していたのはコーリン・ウオードで、1924年生まれで2010年の2月11日に亡くなった。彼はこの「アナキー」以前の47年から60年まで「フリーダム」を編集し、彼の関心のなかには教育、建築、都市計画もあった。01年には、ジョン・ラスキンが1858年に創設したケンブリッジ芸術学校の後身にあたるアングリア高等教育大学から名誉哲学博士を授与された。

「アナキー」の最も特徴的なのはその内容が多彩であることである。たとえば創刊号にはウォード「伝統的な英知からガルブレイスを救済する」、アレックス・カムフォート「性・と・暴力と小説の起源」、ジョン・エラービー「教

育、平等、機会」、ニコラス・ウオーター「ブリテンの『新しい潮流』」がある。この編集方針は最初から最後まで一貫しており、目次を見ただけで興味がそそられる。

既にいくつかの論文が日本語に翻訳され、たとえば100号の全ページを使ったニコラス・ウオーター「アナキズムについて」(02年に新版が刊行)ははしもと・よしはる氏によって訳出された。私もフェラリ「ギリシャ哲学におけるアナキズム」とトニー・ギブソン「リバタリアン犯罪学考」を訳し、総目次とまとめて一冊としたことがある(これは国会図書館にも出版者不明として架蔵されており、必要なら全文を複写することは全くさしつかえない)。

本誌は119号以降、編集をグラハム・モスが担当する第二期が刊行されることになっていたが、これは中止になったようである。

フリーダム・プレスからは、創立100年を閲したとき、その記念に何冊か論文集が刊行されたはずで、いくらかは私の手元にもあるし、いずれは文献センターへ寄贈する予定である。

その際には、初期の「CIRAブレティン」、世界各地の運動の情報を豊富に掲載していた「オーブン・ロード」、サム・ドルゴフその他編「ニューズ・フロム・リバタリアン・スペイン」、アメリカ・アナキズム系の「ダンデリオン」などの雑誌や、スチュアート・クリステイが主宰していた「シエンフエゴス」(これはキューバ革命の闘士の名前で、カストロに謀殺されたという説もある)の刊行物なども同じように取り扱われることになる。





## 保管倉庫と作業スペースを千葉県八街に確保

今春、友人・知人を介して、千葉の八街に土地を入手し、倉庫を建てました（センターメンバーの所有となっています）。倉庫は30坪を共同利用しますので、文献センターは15坪使用できます。書庫仕様ではないので、最終収納はまた一考しなくてはなりません。十分に活用できれば資料の整理・保管が一段と進展すると思います。

現在、富士宮の書庫に収蔵できない資料は分散して保管されていますが、その主なものは①長谷川文庫、②山鹿文庫の一部（整理作業のため）、③山鹿文庫（書簡類）、④平井文庫（欧文）、⑤重複本などです。

センターが所蔵する資料類の整理が進むにつれて、保管と作業スペースが手狭となっていました。富士宮の書庫は重複本を書庫から持ち出すことでスペースを確保して、とりあえずは邦文の単行本を整理して一段落しましたが、欧文資料（単行本・パンフ・雑誌・新聞etc.）は手つかずのままです。また、機関紙誌やミニコミ類も同様

です。整理を始めても、結局またダンボールに戻すことになってーの繰り返しとなってきました。

整理を円滑に進めるには、作業ばかりでなくやはり余裕のある収納スペースが必要です。その点で、八街の保管スペースは利用価値があります。機会を見て、分散した所蔵資料をそこにまとめ、その整理を軌道に乗せたいと考えています。

また同倉庫の敷地は一部（3分



母屋の外観と部屋の様子。倉庫は母屋の右にある



の1ほど）農地を含みますが、全体で1800坪とかなり広く、倉庫の他に母屋と納屋2棟の古家があります。全体をどのように利用していくかは未定ですが、土地・家屋の活用の仕方でも合わせて検討していきたいと考えています。

（奥沢）

## ◎ゲゼル文庫の目録を作成中

『自由経済研究』を発行しているゲゼル研究会が収集した資料300点余りが寄贈されます。1920～30年代に発行された欧文資料が中心で、現在2分の1ほどがリスト化されていますが、他は資料が届き次第まとめられる予定です。

## 「大逆事件 100年」

（年表付き） 頒価 500円  
A 4判 20頁+年表 B 5判 4頁



大好評のため品切れとなり、カレンダーを手に入れられなかった方のために、データをそのまま使用して作った冊子です。カレンダーをお持ちの方へも。

## 文献センター 自己紹介 11

報告書の、全体的な統一はセミナーの内実を正直に反映してか、いくつかの文章の羅列に近いものになってしまった。あまり欲を出して、あれもこれも、ああやってこうやってと言いつつと、編集も遅れる一方なので、まあ、ぎりぎり頑張つて編集し終えたといったところである。

### 山鹿文庫と石川文庫

ここでもちよつと山鹿・石川文庫のことに触れておこう。いずれも向井孝が、個人紙『イオム通信』や『自由連合』の読者に呼びかけて始めた山鹿泰治・石川三四郎の旧蔵書の整理作業である。セミナー報告集に掲載された紹介文によると（いずれも戸駒恒世『べらぼうな通信』による）、まず山鹿文庫の由来は次のようである。

文献センターの建設も、一段階をどうやら終え、次の段階に踏み出そうといった状態となった。長いこと懸案であった文献センター通信の定期化も、月刊のペースで京都で羽熊の手で取り組まれ始めたし、センターの活動は活発さを取りもどした。

当時は毎年、春の3月と夏のキャンペーンが定例化し、時間と地理的な制約から一堂に会する機会を

設けるのはなかなか容易ではなかったが、センター運営の例会は、富士宮の中村宅を分室として月一回のペースでもたれていた。また、73年は作業に追われてセミナーはつけ足しとなっていたが、その後はセミナーに割く時間が多かったことは後に明示されよう。

一九七〇年十二月某日、山鹿泰治、数年来の闘病の末エスペラントとアナキズムに奔走した生涯に終止符を打った。

翌年二月十一日、東京・水道橋の全通会館に追悼会が開催される。エスペランチスト・アナキスト九〇名が参集。

翌十二日、千葉・中山町の山鹿宅に前日の参加者の他、向井孝が個人紙『イオム通信』で呼びかけた十名程が集まり、山鹿の蔵書・文献の第一回目の整理が行われた。

ダンボール箱と書棚に無造作に積まれた書籍・雑誌・新聞・ビラの類は、古本屋に値踏みさせれば二束三文にしかないだろう。それらの文献は通常蔵書整理と称して行なわれるような珍本・奇本・高価本の類では決してない。にもかかわらずこれらの文献が光って見えたのは、主に山鹿が彼の運動の軌跡のようにして残したものだからだろう。集まった人の殆んどは山鹿がどのような人物であったか、どの

### ◎所蔵文献目録第5集の発行

平井文庫（2006年寄贈）と佐藤・藤本文庫（07年寄贈）の目録、および09年に寄贈されたAnarchy 1〜100号（全10巻）の総目次（および著者索引）を内容とする冊子の編集が進行しています。年内刊行を予定しています。

の様な事をしてきた人かさえないし、生前の山鹿との面識などは向井の他には一〜二名しかない。

カード作り、目録作り、新聞整理等のこまごまとした作業は一日で飽きる程に退屈だったが、蔵書の傾向、生活技術の豊富さなどによって徐々に山鹿の人となりがわかり、作業自体の退屈さも少しずつとれてきた。それにも増して文献整理の合宿

## ☆寄贈書

磯谷武郎さんより

M. ネットラウ『アナルヒーの早春』

私家版 2004年 21cm 36p

ドゥルティの友『新しい革命に向けて』私家版 2002年 21cm 28p

P. エルツバッハー『アナキズム』

私家版 2003年 21cm 64p

国外ロシア・アナキスト・グループ

『アナキスト総同盟の組織綱領(草案)』私家版 2010年 21cm 37p

J. ベッケン編『アナキズム経済学』

私家版 2009年 21cm 36p

スペインと世界誌『カタロニア5月事件/CNTとUGT/集産化と社会化』私家版 2005年 21cm 44p

論集『D. フェラリ「ギリシャ哲学におけるアナキズム」/T. ギブリン「リパタリアン犯罪学考」/「アナキー」総目次』私家版 2005年 21cm 48p

英文『Anarchy』1～100号合冊10巻→「雑誌『アナキー』について」(4頁)参照

後藤彰信さんより  
「石川三四郎と吉野作造の思想的軌跡とその交差」抜刷

飯澤文夫さんより

「山崎今朝弥・布施辰次研究」明治大学史資料センター 2009年

「石川三四郎の思想形成と伝統思想」抜刷

飯澤文夫さんより

「山崎今朝弥・布施辰次研究」明治大学史資料センター 2009年

\*小松隆二さんから資料が寄せられていますが、寄贈リストは別途報告します。

<http://www.cira-japana.net/>

が十名程の常時参加者をつくってきたのは、向井が、自由連合の基礎と呼ぶところの参加者各個の人間関係の深化、転化の意識的な追求にあった。

他方、石川文庫も同様に向井孝の努力によって形づくられた。これも戸駒恒世によると、

六月二三日正午、上北沢駅に三名到着、と実に平淡な書き出しで始まる報告なのだが、実をいうともうそれほどに覚えてい

ない。翌二四日、帰りぎわに「せ

めて原稿用紙一枚でも参加感想記を送って下さい」と、つづらなひとみに涙を浮べて懇願したのだが、その甲斐もなく、みたびこの紙面は私の独壇場となり果てた(……と愚痴はここまで！)

初日は参加十八名半。昼食(ラーメン)を食べながらの自己紹介。はじめたときは七名ほどで快適だったが、この間に続々と登場し少々過密気味。三

時頃より、あたらしい蔵書カー

ドの記入方法などの説明があり、続いて実作業に入る。

石川文庫(と仮りに名付ける)の蔵書類は約二千冊。その三割ほどを洋書(主にフランス語、英語)が占め、思想、運動関係が三割、東洋史関係、古代史関係(漢籍を含む)が三割、文学書が一割という内容になる。この他にパンフ、新聞類が、現在目を通しただけでも段ボールに五つはある。だからかなり長

い整理作業になることはたしかだ。

山鹿文庫の整理が開始されたのが71年2月、石川文庫が73年6月とすると、文献センターの活動とほぼ同時期の出来事である。石川文庫はその後に遺族の手で石川三四郎と縁りのある本庄市の図書館に寄贈され、蔵書目録も作成された。山鹿文庫は文献センターが引き継ぎ、現在蔵書目録を作成中である。(続く)

(奥沢邦成)

## 重複資料の整理と頒布について

センターには種々資料が寄せられていますが、重複する資料、あるいはカンパとして寄せられた小冊子類もあります。整理作業の一環として、その一部を販売して資金化することになりました。販売資料の選定基準は以下のようにします。

①センター資料の保存・予備として5部を保存し、他は頒布し資金化する。

### 小冊子販売します

★磯谷武郎さんより種々小冊子を販売用に寄贈いただきました。いずれも少数数の刊行です。頒価は各500円です。希望者は編集部に直接、またはEメールでお申し込み下さい。

国外ロシア・アナキスト・グループ

②商業出版に関わる資料は予備

として良好な状態のものを2部保存し、他は頒布・資金化する。

③資料の重要性を個々に検討し、適宜保存数を確保する。

別枠の保存本（サイン本や書き込み本、その他）は別途。

また、コア資料と関連資料の選

別、さらにはセンター収蔵の範囲など検討を要する課題もあります。が、当面は幅広く考えていきます。

プ『アナキスト総同盟の組織綱領（草案）』（37頁）

ドウルティの友『新しい革命に向けて』他（26頁）

マックス・ネットラウ『アナルヒーの早春』（36頁）

★以下の小冊子などを当センターにて販売しています。

## ◎故・河西善治氏の蔵書が寄贈されます

昨年12月に急逝された河西善治（1946年〜2009年）の蔵書が、本人の生前の希望により文献センターに寄贈される予定です。

石川三四郎『弁証法的唯物史観の批判』

『黒の手帳』10・11号

エンリコ・マラテスタ『無支配への道』『選挙戦に際して』

江口幹『五月革命の考察 日本現代革命への教訓』

クロボトキン『法律と強権』（右川三四郎訳）、『青年に訴う』（大杉栄訳）など

『集団不定形』7号など

大濱亮一『革命家 荒畑寒村の遺言状』

なお、これらは東京・新宿のイレギュラー・リズム・アサイラムでも扱っています。

す。

同氏は1969〜70年頃、麦社の活動に参加し、70年代半ばからルドルフ・シュタイナーの翻訳出版を始め、人智学出版社を設立しました。80年代には緑の党、エンデ、ボイスなどの紹介と出版、雑誌『第三の道』『人智学研究』の発行にも取り組むなど独自の活動を展開しました。

詳細は次号以降に改めて掲載する予定です。

### アナキズム文献センター通信

第14号

発行／2010年9月5日

発行所／アナキズム文献センター

編集／運営委員会

連絡先／東京都新宿区新宿

1の30の12

郵便振替口座／

00850-3-30010

口座名 A文献センター

Eメール／

info@cira-japan.net

定価／一部100円